



【城山小学校 平和祈念館の話】

今日は、平和祈念館についてお話しします。平和祈念館は、もとは城山小学校の子供たちが勉強する校舎でした。稲佐山の麓の緑豊かな丘にそびえ立ち、白く美しい校舎として有名でした。城山小学校の子供たちにとって美しい校舎は自慢でした。

しかし、1945年8月9日に落とされた、原子爆弾により、城山小学校に通っていた1,400名の児童、31名の先生方が亡くなりました。生き残ったのは、45名の児童と4名の先生でした。たくさんの尊い命が奪われ、白く美しい自慢の校舎は、大きく壊されてしまったのです。城山小学校では勉強ができなくなり、今の稲佐小学校の教室を借りて勉強することになります。

その後、被爆した校舎を修理して教室として勉強できるようになります。時が経ち、古くなって危険だということで、被爆校舎を取り壊し、新しい校舎に建て直す案が出されます。しかし、原子爆弾が落とされたときに実際に被害にあった建物を残したいという当時の育友会や慰霊会等のみなさんの強い訴えから、階段塔とその両側の教室を含んだ校舎が残されることになります。

被爆校舎を残したものの、十四年間は危険な建物としてフェンスで囲まれ、立ち入り禁止になっていました。しかし、原子爆弾の恐ろしさを伝えるために残したのだという城山小の子供たちの願いが叶い、当時の資料が見られる、今の平和祈念館となりました。

祈念館になった後は、原子爆弾による爆風で壊されてしまった城山小学校の校舎や城山の町の様子、熱線により炭になってしまった木煉瓦、城山小学校で亡くなられた方々の名簿や写真などの貴重な資料が展示されています。これらの資料は、原子爆弾の恐ろしさだけでなく、被爆された方々の思い、平和を願う人々の思いも一緒に伝えています。

平和祈念館には、毎日、たくさんの方が見学に訪れます。子供も大人も、長崎だけでなく、日本全国から、世界中からも、たくさんの方が学びに訪れます。そして、その人たちから送られてきた手紙や寄せ書きには、原子爆弾の恐ろしさについて知ったことや、今過ごしている日常の大切さ等、平和への思いが書かれています。平和祈念館に込められた平和への願いがその訪れた人たちによって世界中の各地へと広がっているのです。

故・元平和発信協議会 会長の 内田 伯（つかさ）さんは、

「目から消え去るものは、心からも消え去る。原爆の遺構は、残すこと、見て感じること、伝えることに意味がある。」とおっしゃっています。城山小学校のみなさん、これからも平和への思いをつなぎ、平和祈念館を守っていきましょう。